

ユタカの新しい取り組み

■ F プロジェクト

営業課と開発課の係長以下の社員が集まり、会社のあるべき将来について話し合う会議を発足させました。

各拠点をウェブでつなぎ、会議の名前、テーマの決定、グループ分けから開始しました。会議の名前は、近い将来に会社がイノベーションを起こす企業にしたいという希望からFUTURE プロジェクトに決定しました。

1. 取り組みの概要

- ・ 自由に意見の言える環境作り
- ・ 問題意識の共有
- ・ 社会貢献を意識する



2. 背景にあった課題

若手社員が上司に気を使い自由に意見を言えない。

目の前の仕事に注力しているが故に、社会貢献に関して考える時間がなかった。

おぼろげな問題意識を言語化する機会が少ないために問題解決に至らない。

3. 進行中のテーマ

① 金属・・・の開発

会社の強みである金属加工技術を別の市場で生かしたいと考えて立案。

ターゲットや製品コンセプトだけでなく、従来とは異なる販路の模索を行う。

② 製品の統廃合

無駄を削減することで社会貢献をしたいと考えて立案。

仕様の近い製品を統廃合することにより製作で発生する無駄を削減する。

営業の目線、工場の目線で打合せを重ね器種を選定した。

③ 東京工場の空きスペースの活用

松本工場への生産工程移管により発生した東京工場の空きスペースを活用したいと考え立案。

BCP や松本工場の負担軽減など、会社や同僚のことを考えた案が多い。

他、野菜工場やレンタルスペース、消毒液の製造など、従来の製品サービスにとらわれない案も多くあがった。

4. 成果

発足したばかりのプロジェクトで未だ具体的な成果はあがりませんが、次の点で成果が出ております。

- ① 当初は議長が指示しなければ発言しなかったメンバーが、自由に発言するようになった。
- ② メンバー各自が会社への貢献、社会への貢献を強く意識し、言語化していくことにより、問題解決のプロセスを考える習慣ができた。



■ ニーズ・カード

5 年先、10 年先のユタカを創造する

2020/7/8→11/01 Ver.2
作成；営業部

[分科会委員へ](#)

顧客ニーズカード

発行日	
発行者	

- ・ お客様からの要求をしっかりと受け止める。メモを取る。
出来る！出来ない！は考えない。
- ・ 未来のユタカで販売したい製品を創造する。

マーケット先	
新分野・新たな取組	既存市場・既存市場拡大・新市場
内容 名称・品名 機能・デザイン	

- ・ 2025 年～の製品群を創造する。

既存マーケットの半導体用、一般産業用に拘らず第 3 市場での提案。

SDGs（社会貢献、持続可能な活動）脱炭素社会に向けての製品は、活動は。

環境などの提案も。フリーな発想で

新たな取組みで社員同士のコミュニケーションが活性化し成果が現れると思っております。皆様には、近い将来、本プロジェクト、N カードでの新製品を紹介できる時を楽しみにしております。

■水素社会実現に向けての取り組み

2014年4月に政府が水素社会の実現に向けて「エネルギー基本計画」が閣議決定され、同年6月には「水素・燃料電池戦略ロードマップ」が策定され、12月にはトヨタ自動車がMIRAIを販売し水素社会に進んでいく期待が大きくなり、翌年2015年は水素元年と言われるようになりました。

産業ガス業界もこのような動きの中、水素ステーション設備に使用する機器が82MPaと超高压の為、参入メーカーが少ない事が問題視されていたことから当社に対して水素ガスメーカー様からステーション機器の製作検討がありましたが、70MPa仕様の減圧弁HPR、背中弁の販売実績はありましたが、超高压仕様100MPa対応の製品は持ち合わせしておりませんでした。

社内で検討し「水素社会実現に向けて技術で貢献する」を目的に2015年に参入を決定し水素ステーションに使用される機器の減圧弁、背圧弁、過流防止弁の開発をスタートさせました。

水素ステーションでは水素ガスを82MPaで安全に使用され100MPaでも耐える製品が要求されます。

精密な加工技術が求められ又、品質保証では実ガスH₂ガスでの評価試験が必要になる為、同年に公益財団法人水素エネルギー製品研究試験センター(HyTReC)

水素エネルギー製品研究試験センター(HyTReC)における

製品テスト実施の様子



性能・安全確認試験を数回実施し、安全を確認した上で2016年秋にリリースを致しました。

FC展、地方の水素関連展等に出展し水素ステーション業界に参入企業として活動を始めました。翌年2017年、北海道向EFV1、HPBを皮切りに納入ができるようになり又、市場外的環境も変化し2018年からは多くのステーションに採用していただけるようになりました。今後もスタート時の「水素社会実現に向けて技術で貢献する」の考えを忘れず、信頼される企業として使命感をもって水素エネルギー社会の実現に貢献して参ります。